

「新次のしょうぎ」 ～勝ち・負けにこだわるあまり…～

1. 学年・組 4年西組 35名

2. 目指す子供の姿

自分の考えと比べながら仲間の考えに耳を傾け、相手意識を持って再構築した考えを伝えることによって、多面的・多角的に物事を捉え自分を見つめ直し続けようとする子供

3. 本時における「子供とつくる学び」 4. 「子供とつくる学び」を実現するための手立て

人間は誰しも過ちを犯す。子供たちは何となくこのことに気付き始めている。人は自分の欲求を満たすため、願望を叶えるために、うそをついたり、ごまかしたりする。人は自分の立場が不利な状況であればあるほど、自己防衛の一種の方法としてうそをついたり、ごまかしたりする。うそやごまかしは良くないと思っている子供が大半である。しかし、勝負に熱く、勝ち負けにこだわるあまりになかなか自分の感情と向き合うことができず、上記のような経験をしている子供も多い。よって、本時では「人が見えていないところで新次が桂馬を動かしてしまった時の気持ち」に寄り添いながら、正直であるために必要なことは何かについて考えていく。

本時では、比較を通して物事を多角的・多面的に捉えることができるようにする。そのため交流は欠かすことができない。多様な考えを受け止め合うことで、新たな発見をしていく場面を子供とつくる学びと定義する。

学習では積み上げが大切であると考え。積み上げがあるからこそ、自分の変化を評価できたり、仲間の考えに対して寛大に受け止めたりすることができる。新次の心情を自分と重ね合わせながら、仲間の考えに耳を傾け、これからのよりよい生き方につなげていくための授業を構築していく。

まず、多様性を受け入れやすくするために、子供の発言を受け止める雰囲気大切に。そして、物事を多面的・多角的に捉えるための手立てとして「3つの比較」を用いることとする。

比較① 既習の内容項目の考えと比べる。

今までの学びからさらに視野を広げていく良さや積み上げることの大切さを感じられるようにする。

比較② 主人公の対局について比べる。

お話の中で伊三郎おじさんと佐平おじさん2人と将棋を行っている。その時の心情には違いがある。対比させながら主人公に寄り添い、心情を理解するとともに、状況が変われば人間の心情は変化することを客観的に捉え、よりよく生きるために必要なことを考えられるようにする。

比較③ 自分の過去の経験と比べる。

自分の経験を想起させることで主人公の気持ちと重なる部分もあるだろう。経験と重ねること、より明確に自分の言葉で価値を語るができるようにする。

比較で考えることで話も整理しやすく、考えを練り直す時間も確保できる。言葉だけの理解に留めることなく、学びの連続性に価値があることに気付かせたい。

5. 教材について

本教材は、不正をして勝利を得る将棋が好きな新次（主人公）が、良心の呵責に苦しみ悩む姿が描かれている。新次（主人公）のように「勝ちたい」と願う状況は日常生活の中で多くの子供が経験していると考えられる。また、人の見ていないところで、自分の思いを通すための行動についても経験のある子供たちも多いだろう。そのような行動は果たして自分に正直であるといえるのかということについても自分自身に問うことができるお話である。

勝負に熱い気持ちを持っている子供たちだからこそ、新次（主人公）の心情に共感することができる。そのような場面を自分の経験と比べながら思い浮かべることで、偽りがもたらす苦々しい思いを疑似体験することが可能であり、正直であることの良さを考え、実感することができるであろう。実感を得ることができれば、自分事として捉えることができ、考えにも深まりが出ると思われる。新次（主人公）が2人と対局をすることから、同じことをする時でも相手が変わったり、自分の気持ちが変わったりすると同じ気持ちで勝負することができないことも理解しやすいと思われる。場面について想像しやすい教材でもあり、物事を客観的に見ることも容易で、自分を顧みることもでき、自分を見つめる手掛かりになり得る教材であると思われる。本教材において新次（主人公）は過ちをすぐに認めることができなかった。人間の弱さや誰にでも同じような過ちがあるということを理解することで、多様性も受け入れやすくなるだろう。

また、既習の「正直」五十円分は、たこ焼きを買った主人公のたけしが、おつりを50円多くもらったことに気づき、何となくそのままらってしまった。しかし、公園のベンチで「おつりが少ない時だけ言って、多い時には言わないというのは…」という葛藤が描かれているお話である。情景を想像しやすく、共感することもできたことにより、「正直はいいものだ。」「正直は大切だ。」「でも、正直すぎるのも…」など子供たちは正直であることの難しさに直面している。

今回大きな違いは、新次（主人公）は過ちを認められなかったことである。何がそうさせたのかを考えるためには、今までの考えが必要となってくる。

2つの教材を通して、「過ちを認め、正直に明るい心で生活する」というのは状況によって変わることや心情によって左右されることを子供たちは実感的に学ぶことができるであろう。

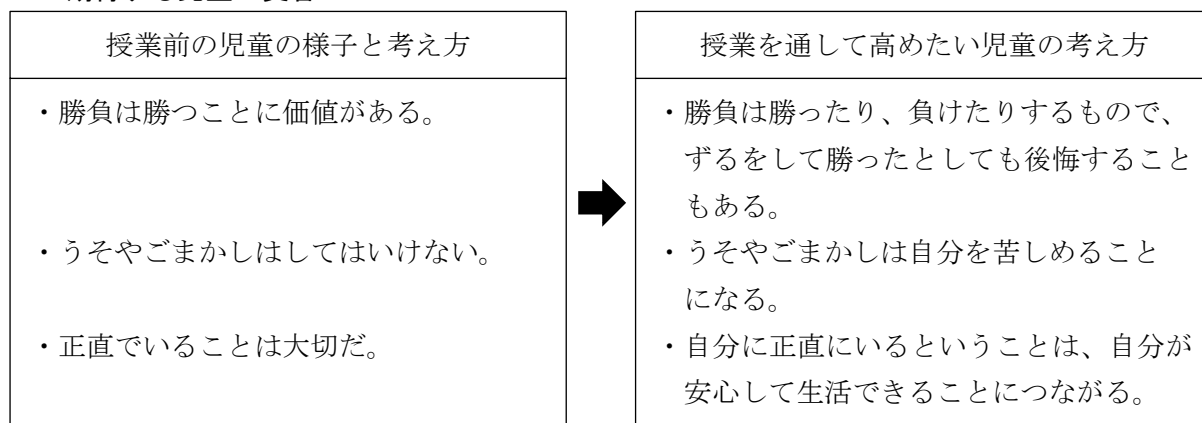
「正直」の捉え方を多面的・多角的に捉えるために有効な教材であると思われる。

6. 内容項目の目標

過ちは素直に改め、正直に明るい心で生活すること

【中学年A-2 正直、誠実】

7. 期待する児童の変容



8. 本時の目標

ずるをして勝った新次の心の動きについて考えることを通して、正直であるからこそ、明るい心で伸び伸びとした生活を送ることができることに気付き、ごまかしたりせず、正直に明るい心で生活しようとする道徳的実践意欲を養う。

9. 本時の展開

